2017年第64回応用物理学会春季学術講演会　特別シンポジウム
「科学技術の未来に向けたダイバーシティ推進　～男女・文理・職種・国籍の観点から～」開催報告

男女共同参画委員会
委員長　河西　奈保子

開催日時：2017年3月15日（水）10:00～17:30
開催場所：パシフィコ横浜 展示ホールB5
参加人数：58名

特別シンポジウム プログラム（敬称略）
＜午前の部＞

10:00-10:15	全体趣旨説明	増田 淳（産業技術総合研究所）
10:15-11:00	「文理分離の実態と課題」	河野 銀子（山形大学）
11:00-11:45	「研究所で働く、研究者ではない人たちの話」	井川 奈々子（産業技術総合研究所）
11:45-12:00	「応用物理学会事務局から見た学会運営、会員との関わり」	塩尻 誠子、白石 陽子（応用物理学会）
12:00-13:30	NEWMAP懇親会	

＜午後の部＞

13:45-13:50	午後の部趣旨説明	河西 奈保子（男女共同参画委員会委員長）
13:50-14:50	基調講演「Integrating gender into research and innovation for better outcomes」	Dr Elizabeth Pollitzer, Director, Portia (UK)
14:50-15:35	基調講演「Movement of Gender Research and Innovation in Japan & Asia Pacific -Toward Gender Summit 10 -」	渡辺 美代子（科学技術振興機構）
15:35-15:45	会長挨拶	保立 和夫（応用物理学会会長）
15:45-16:00	休憩	
16:00-17:20	パネルディスカッション　司会：増田 淳（産業技術総合研究所） パネリスト：財満 鎭明（応用物理学会副会長）、渡辺 美代子（科学技術振興機構） 井川 奈々子（産業技術総合研究所）、松木 伸行（神奈川大学） 河西 奈保子（男女共同参画委員会委員長）	
17:20-17:30	男女共同参画委員会での1年間の議論をふまえた提言、総括	増田 淳（産業技術総合研究所）

特別シンポジウム「科学技術の未来に向けたダイバーシティ推進　～男女・文理・職種・国籍の観点から～」では、様々な多様性を積極的に受け入れ、多様な人材の能力を最大限に発揮可能な社会の発展に貢献すべく、男女共同参画に限定せず、幅広い視点からダイバーシティについて議論しました。また、軽食の立食昼食会「NEWMAP懇親会」により男性女性問わず会員の交流の場を設けました。

午前のセッションでは３つの講演が行われました。河野氏（山形大）の講演は女子高校生の文理選択の実態と課題に関する内容で、「理系」「文系」という言葉の出現は80年代と比較的最近であること等が紹介された後、高校での「理系」「文系」のカリキュラムが大学入試対応のために策定されていることや、「文理」が社会において属性とされていることが課題として挙げられ、「理系」と「文系」の知の融合が多様性ある社会の確立に重要と結論付けられました。井川氏（産総研）の講演では、研究所における事務職の役割について自身が関わった大型研究コンソーシアム運営の観点から紹介され、事務職も研究の内容をある程度理解し研究職と助け合うことで、研究者の意図に沿った契約締結が実現し、優れた研究成果に結び付くとの提言がなされました。塩尻氏、白石氏（応用物理学会）は、講演会史上初めて事務局職員の立場で講演し、学会の理事や代議員に多様な属性の会員を登用しダイバーシティ推進を図っていることが紹介されるとともに、女性の活躍のためには多様性のあるロールモデルの提示が必要との課題が示されました。

昼食の時間帯でのインフォーマルミーティング「NEWMAP懇親会」は、男女共同参画に関する交流の場

として特別シンポジウム会場のすぐそばで開催されました。旧「女子会」から数えて９回目の開催になりますが、名称変更が功を奏し参加者は男女ほぼ半々となりました。委員長および財満氏（本学会副会長、名古屋大）の挨拶と乾杯でスタートし、男女共同参画や研究現場のダイバーシティについて、歴代の会長や、特別シンポジウムの発表者とも自由活発に議論するとともに、世代を越えた交流を図ることができました。

午後のセッションでは、本年５月に東京で行われた Gender Summit10（GS10）に関連し、Gender Summit（GS）の創始者である Pollitzer 氏（Portia 代表）と、GS10 の主催者である渡辺氏（JST 副理事・ダイバーシティ推進室長）から英語での基調講演がありました。GS は科学技術分野（STEM）における男女共同参画をめざして世界各国で開催される国際会議です。 Pollitzer 氏は、世界の男女共同参画の現状と課題についてデータを示して紹介した後、物理分野でも男女共同参画により技術革新（イノベーション）が実現できると提案しました。その中でも、女性研究者はチームでの研究で活躍する傾向があること、認知能力や感覚・薬効の性差から新しい技術革新が生まれること、動植物の性を早期成長段階で判別する技術が必要とされていることなど，新しい観点が紹介されました。また渡辺氏は、アジアや日本における STEM での男女共同参画における GS10 の位置付けと、会議の議題について紹介し、応物が「男女共同参画推進のための研究者情報の整備と活用」というテーマで参画していることについて述べました。

パネルディスカッションでは、増田の司会により財満氏、渡辺氏、井川氏、松木、河西をパネリストとし、「評価制度」と「文理選択」について、会場参加者とともに活発な討論が行われました。「評価制度」については、ライフイベント（出産・育児・介護など）時における上司との協議による共通の目標設定とそれに基づく評価、ライフイベントの経験者を評価者として登用、評価期間の柔軟な変更、といった提案がなされました。一方、評価者と被評価者が協議した目標は低く設定される傾向があり全体の活性化を阻むというコメントもあり、制度設計の困難さを認識させられました。会場からは、「ライフイベントそのものを『社会への貢献』として評価に組み入れる」という意見も寄せられました。「評価の公正性」については、多様な人材に対して多様な評価軸を設けるという共通認識に至りましたが、一方で、成果の正当な評価に集中するほうが良い、との意見もありました。「文理選択」に関しては、特に女子生徒に対して、進路相談相手である母親の「理系に対するイメージ」が好ましくない（地味、真面目すぎる）、理系進学のロールモデルの提示不足、私大理系学部の学費が高く女子への投資に親が躊躇する傾向にある、という問題が提示されました。これについて、女性理系教員や女性研究者などのロールモデルを醸成し教育の場で示すことが重要、という共通の見解が得られました。また、男女問わず理系人材を増加させる方策として、教育熱意のある博士研究員が自身の研究を進めながら、小・中・高等学校で理科を教える制度の創設が提案されました。一方、教育課程で早期から「理系」「文系」に分離しないことが好ましいという意見が大勢を占めましたが、文理を融合したいわゆる「文理両道」の教育制度への転換施策については今後の課題とされました。

男女共同参画委員会では、委員会での活動を通じて抽出された様々な課題について議論し、シンポジウムや NEWMAP 懇親会の開催、Facebook 等の活用により、男女共同参画に関する情報の発信や共有、情報交換の促進に貢献して参ります。

特別シンポジウムの様子

パネルディスカッションの様子